

| 論文の和文要旨   |                  |
|---|------------------|
| 論文題目  | 銅ベルト・ベンバ語のポライトネス |
| 氏名  | チルプラ・スビラ         |
| <p>本論文の目的は、ザンビアの銅ベルト州で話されているベンバ語のポライトネスに関する言語現象を記述し、社会言語学的分析を行うことである。より具体的に言えば、銅ベルト・コミュニティのベンバ語話者が様々な社会的相互作用の中で用いる（言語的および非言語的）ポライトネス戦略を調査し、ベンバ語においてポライトネスを示す言語的マーカーとストラテジーを説明した上で、どのような社会的変数がポライトネスの程度を決定するかを明らかにする。さらに、ポライトネスを示すマーカーの使用と態度に世代間および男女間のギャップが存在するかどうかについても明らかにする。</p> <p>主要な分析の枠組みとしては、Brown and Levinson (1978)のポライトネス理論を用い、ベンバ語におけるポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイス、および主要なポライトネス戦略（bald on record、positive politeness、negative politeness、off record など）の現れについて検討する。</p> <p>序章では、まずポライトネスという概念の導入を行い、次にベンバ語の社会言語学的状況と文法の概略を示し、最後にこの研究の目的を提示する。第二章では上述のポライトネスに関する概念についてジェンダー・ダイナミクスも含め、先行研究を精査する形で包括的に論じる。</p> <p>第三章ではデータ収集と方法論について述べる。本研究では Zoom と WhatsApp を利用したガイド付きオンライン・インタビュー、タブーに対処するための Google フォーム、ネイティブ・スピーカーとしての研究者の洞察という 3 つの手法を用いた。オンライン・インタビューには 4 人が参加し（Zoom による参加 2 名、WhatsApp による参加 2 名）、Google フォームを用いた質問票には 14 人が回答した。回答者は、多様な年齢層、学歴、言語的プロフィールから選ばれ、性別と年齢のバランスの取れた代表となった。</p> |                  |

第四章で研究結果を述べる。まず、クラス2の名詞接頭辞 *ba-*とそれに伴う述部形態素の複数形による一致をポライトネスマーカ―として用いる点で、先行研究に見られるバントゥー諸語と同じ特徴を示すことを確認した。さらに、場所名詞のクラス17に対応するクリティック=*ko*は、特に依頼の際の丁寧語標識として頻繁に出現することがわかった。言語学的分析によると、親族名称はしばしば親族以外の大人にも拡張して使用され、テクノニミー（Xのお母さん、お父さんなどの呼称）は年長者や社会的地位の高い個人を指す場合によく使われることが明らかになった。とりわけ注目すべきこととして、ベンバ語話者は一般的に高齢者や地位の高い人に対して礼儀正しさを示すが、この行動は文脈や聞き手によって大きく異なるということが挙げられる。さらに、間接的な要求やタブーとされる語彙の使用回避など、FTAs（Face Threatening Acts; 人の対面を脅かす行為）を避けるために使用されるネガティブ・ポライトネス戦略が明らかになると同時に、グループ内のマーカ―、称賛、尊重の使用を含むポジティブ・ポライトネス戦略も観察されることがわかった。さらに、言語的タブーや全体的なポライトネスに対する世代間および性別のギャップについても考察した。最後に、この研究ではコミュニケーションにおける非言語的ポライトネス戦略の重要な役割も明らかにした。

キーワード：敬語、ポライトネス、社会言語学、回避、フェイス、非言語的ポライトネス戦略